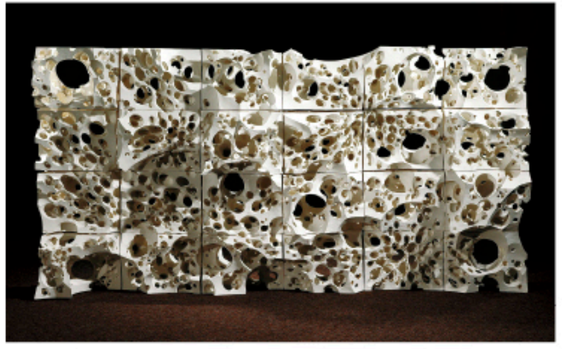

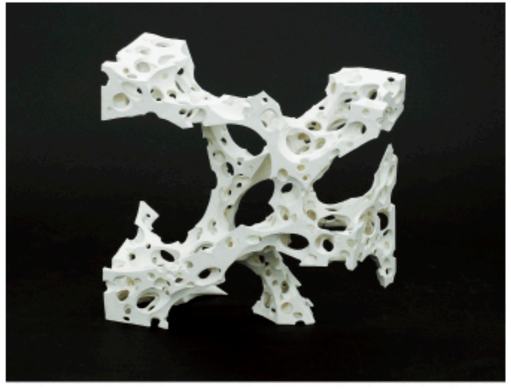

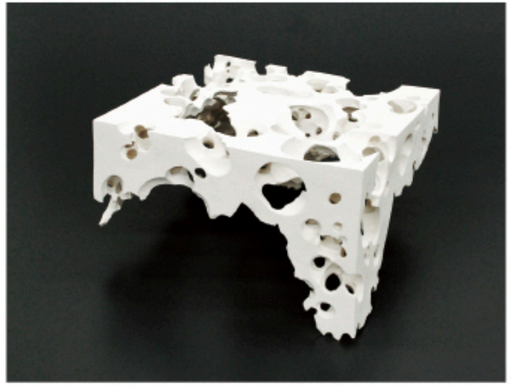

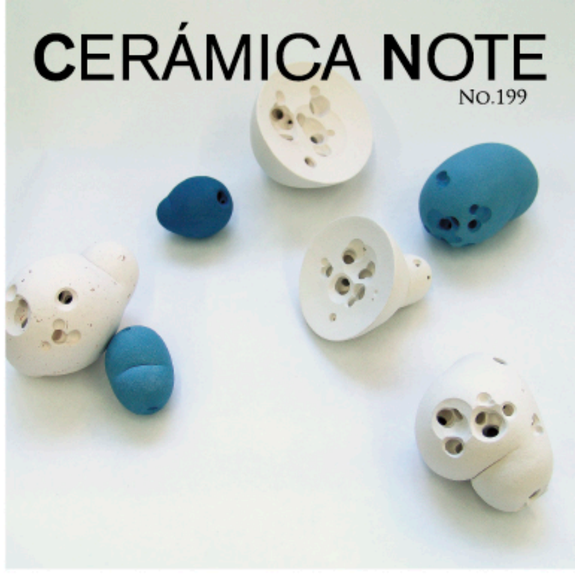

LIXIL
ギャラリー

LIXILギャラリー ガレリアセラミカ
東京都中央区京橋3-6-18東京建物京橋ビル LIXIL:GINZA 2F
〒104-0031 phone 03-5250-6530
CERÁMICA NOTE No.199 制作発行:株式会社LIXIL デザイン:IT IS DESIGN

cerulous 2013
h1200×w2400×d400mm

porous 2012
h400×w400×d150mm

表紙:次の波 2011
h100×w400×d400mm
half cube? 2012
h170×w380×d380mm

— 陶 HOLE —

堀口彩花展

2014年1月9日(木)—2月3日(月) 10:00a.m.—6:00p.m. 水曜日休館

HORIGUCHI AYAKA

CERÁMICA INTERVIEW

Horiguchi Ayaka

2013年11月11日　インタビュー：大槻恵美（LIXILギャラリー）

手めがねの穴からのぞく

— 「Consious」(2013) は多孔質の岩の層を見ているようで迫力があります。この作品はどのようにして生まれてきたのですか

堀口：私は穴をモチーフにして白い陶土で制作をしています。それまでは小品だったので、塊をつくってから感覚的に穴を彫る制作方法でしたが、「Consious」(2013) は大学院の修了制作作品でしたので、ある程度大きな作品で自立できるように制作したかったんです。それで24のパーツに分け、始めから穴の位置や全体を計画的に構成して、最後にまた細かな手作業を加えることで完成させました。

— なぜ穴がモチーフなのですか

堀口：大阪芸術大学の陶芸コースに入って、自由表現の課題の時に最初につくったのが手でした。手を選んだのは、小さい頃から手めがねからのぞいてみる行為が好きだったからです。のぞいた向こう側に何が見えるのか、ワクワクするんですね。のぞくという行為は対象に対しての興味や、じっくりものを見るということを象徴的に表わしていると思います。

本当は穴の向こう側をのぞく行為を通して、見るということを表現したかったのですが、手をつくることは構造的にとても難しく、その頃は技術が足りなくてそれはどうしようもない作品になりました。でも、穴のコンセプトに繋がるきっかけとなりました。

— 堀口さんにとって、穴の向こう側に見えるものは何でしょうか

堀口：のぞき見るという場合、最初からそこには窓のようには全貌が見えていないですよね。万華鏡ものぞき見るものですが、私はのぞいても中がキラキラしたグロテスクな感じがしてあまり好きではないんです。人がつくったものだからでしょうか。妄想できる余白がないからでしょうか。

私は穴というものを発見した時に、そこをのぞいたらどんな世界が広がっているのか、穴の中の真っ暗な世界、その向こう側には何があるのか、自分で自由に想像したいのだと思います。想像するということは、例えば私は寝る前に今日一日のことを思い起こす習慣があるのですが、あの人はこんなことを言っていた、それはこういうことでと、そこからだんだん私だけの連想が広がっていきます。穴をのぞいて期待する時の感覚も、それに近いものなんです。

制作で土を彫る、私の場合は穴を開けるわけですが、その穴が繋がって広がっていくイメージと、自分の頭の中で考えや思いが広がっていくイメージは似ているかもしれません。実際は穴が開いていくのだけれども、それは私の思いや考えを埋め込んでいることと同義なのかもしれません。

層　2011
h300×w1800×d2400mm

— 作品の穴は何層にも重なりとても複雑な形体に見えます。どのようにつくったのか不思議でした

堀口：最初の頃の作品は大きなお椀をふたつ重ねるように、上のお椀、下のお椀のパーツに分けてそれぞれ穴を彫って開けてから、最後に両方を重ねてひとつの作品につくっていました。でも最近では一体型でも複数の穴を開けることが出来るようになり、近作の四角いフォルムの作品では完全に一体型になりました。

制作の時に手で彫るということが私の中では重要な行為なのですが、一体型の作品は土の塊をつくってから穴を開けていく時に、軽石やヘチマのスカスカで何層にもなっている構造を見て参考にしたりすることもあります。でも特に具体的なイメージはありません。

— 堀口さんの作品には張りつめた緊張感が感じられます

堀口：かたちに関しては円形も四角形もあって自分でもまだ漠然としている部分があると思いますが、緊張感は大切で、自分で格好いいと思えるかたちの重要なポイントになっています。

私は事前におおよそのイメージスケッチはしますが、後はつくりながら決めています。例えば「層」(2011) は、シャープできれいなラインとはどういうものかと考えながらつくりました。私は器のかたちで下の面1点で立っている姿が一番美しく思うんです。展示の方法に関しても、絶妙なバランスを意識してより緊張感を出すようにすることが一番大切で、そこを工夫しています。

陶芸の存在感に魅かれて

— なぜ陶芸コースに進まれたのですか

堀口：小さい頃から手で何かをつくることが好きで大阪芸術大学に進学したのですが、1回生の時、染色、金工、ガラス、陶芸の4つのコースを回ってみて、ロクロが一番面白くて、じかに土に触れてつくれる陶芸に興味を持ちました。それまでは陶芸＝器のイメージが強かったのですが、大学に入って多くの作品を見るようになり、初めてやきものでもこんな作品が出来るんだと大きな衝撃を受けました。

本当は卒業してからも続けられるように器をつくる技術を身につけたかったのですが、気づいたら修了展で造形的な立体作品をつくっていたという感じです。3回生くらいまでは器をつくっていたのですが、4回生の時の大学の助手だった田中雅文さんの影響も大きいです。造形的な作品と同時に器も制作されていて、そこには隔たりがない。器だけにこだわって、自分は世界を狭めてしまっているのではないかと考えさせられました。大阪芸術大学では周りの友達も現代美術に興味を持っている人が多く、色んな作品に触れる機会がありました。自分の中で本当に表現したいものは何かと考えさせられることも多かったです。でも私は土を彼っているので、課題と平行して陶芸についても考えました。陶芸の存在感、伝統工芸の歴史の重みには圧倒されています。器も精進せずに自分はこんな穴なんか開けていていいのだろうかとずっと考え続けているんです。

capacity hole　2011
h80×w400×d460mm

capacity hole　2011
h120×w600×d500mm

— 今後の作品はどのようになりそうですか

堀口：卒業してから、若手の作家が集まった交流会「陶ISM」の展覧会に参加したり、器をつくる機会が増えてきています。でも私は酒器がテーマの展覧会でも、器にも穴を開けたくなってしまうんです。それで使い勝手に関してはクリアできていない問題があるので今勉強中です。

「Consious」(2013) の制作を終えて、感覚で穴を開けていくことが自分の中で完成してきたような感触もあります。まだ次の具体的なイメージはないのですが、今とは違うかたちで表現できたらと思っています。

これまでのコンセプトや説明を抜きにして自由に無作為につくってみたいと思っていますが、今もアイスクリームを食べている時にも、ついつい穴を開けながら食べたりしちゃうので、他の事を試しても、結局穴に返るのかもしれません。他の素材もやってみたい気持ちもありますが、やきものの質感でしか出せない世界観もあると思っているので、やきものに関しても遊のりは未だ未だ違いですが、出来る限りのことをして頑張りたいと思っています。

堀口彩花プロフィール

1988　大阪生まれ
2011　大阪芸術大学芸術学部工芸学科陶芸コース　卒業
2013　大阪芸術大学大学院博士前期課程工芸専攻領域　修了

展覧会

2011　大阪芸術大学卒業制作展　研究奨賞（大阪芸術大学・大阪）
ART RESCUE展（ギャラリーBIRD・大阪）
アートフェア京都2011（ホテルモントレ京都・京都）
第23回　日韓交流作品展（大阪芸術大学・大阪）
2011清州国際ビエンナーレ（韓国）
2011アジア現代陶芸・新世代の交換展（中国）

2012　陶ISM2012 -若手陶芸家交流展-（吉民家古木・桧木）
わんのかたち展（ギャラリーヴォイス・岐阜）
アート京都2012（ホテルモントレ京都・京都）
陶のかたち展（ギャラリー北野坂・兵庫）
Art&Design Fes（ウェスティンホテル大阪・大阪）

2013　創立60周年記念未生流中山文甫会いけばな展
（大阪高島屋グランドホール・大阪）
陶ism2013 -若手陶芸家交流展-（吉民家古木・桧木）
陶のかたち展（ギャラリー北野坂・兵庫）
陶ISM in 笠間ギャラリーロード（茨城）